

歴史から学び、未来を拓く

増田 一世

やどかり出版では、保健師活動の歴史を辿る本を出版している。昨秋には群馬の保健師が編集委員会を組織し、『今、そして未来につなぐ 歴史から見る群馬の保健婦活動』を上梓した。さらにその別冊として『野仏のうた』を内堀千代子さんが編集された。この春には『予防活動に生きる・4 大地に生き人々に育てられて』を出版した。著者は今野勝子さん、戦前から保健婦として活動してきた女性だ。

また、「自治体に働く保健師のつどい」という保健師の自主的な活動を続ける団体では、仲間の力をより合わせて、自己資金づくりを行い、長野県安曇野にセミナーハウスと併設の形で保健婦資料館をオープンさせる準備が着々と進んでいる。

これらは、活動の記録を残す、さらにその記録に刻まれた先達の活動から学ぶ取り組みである。現在の状況だけを見て活動のありようを考えるのではなく、保健師の歴史も踏まえて、これからの活動のあり方を見出す試みである。こうした取り組みからは、目先の動向に振り回されがちな状況に危惧を抱き、歴史を見つめる中で、現在の活動を検証し、未来のありようを模索することが大切なのだという保健師たちからの強烈なメッセージが発信されている。

精神医療の分野では、メンタルケア協議会の主催で開催された「日本の地域精神医療を振り返る」というシンポジウムで、日本の地域精神医療の草分け的な存在である浜田晋氏

が、「浜田晋が語るおもての語りらの話」と題して講演を行った。浜田氏は、日本の精神医療は変わっていない、自分にまだ時間が残されているのならば、もう一度精神病院の改革に取り組みたいと最後にコメントされた。地域精神医療の先達の語る歴史と現状への憂いを、私たちはどう読み解き、行動するのかを深く考える時期にあるのではないかと考えさせられた。精神障害者は歴史の中でどのように処遇されてきたのか、その処遇はどのような社会的な要請によって行われてきたのか。外国からも指摘された精神医療の問題は、本当に解決したのか、解決しなかったとしたら、どこに問題があったのか。精神医療改革は、単に精神科病床数を削減することにあるのではないはずだ。どのような改革を進めていくのかが問われている。

「歴史を学ぶこと」は、これからの社会をどんな社会にしたいのかを考え、行動する原点となることなのだと思ふ。マスコミの報道に世論が誘導されていく恐ろしさを感じることがたびたびある。めまぐるしくさまざまな制度が変わっていくこの時代に、歴史から学び、物事の本質を掴み取る力を蓄え、ともに学び合い、行動できる仲間を作っていくことが急務なのではないか。視野を広げ、活動基盤の現場を大切に、日々の活動を行い、その営みを記録化し、振り返り、また活動を再構築していく、こうしたたゆまぬ努力が必要なのだと思ふ。こうした営みが未来を作っていくことになるのだと信じてい